

にむざたらしいことである。これはさすがに私にいたくしい感じを與へた。無論そのあたりにも、澤山の死體が浮いてゐた。

川の彼方を見渡すと、札幌麥酒の建物はすつかり焼けて、赤い煉瓦の外廓のくづれたのが、嘗て見たヴェルダンの戦跡のやうであつた。

九

私たちはそこから、鐵筋の外廓の残つた神谷バーの前を仲見世のところへ出でた。仲見世はまるで、發掘されたボムベイの廢墟を見るやうに、煉瓦で積んだ壁仕切りだけが、半ばくづれて残つてゐた。中にはもうすでにそれへ持つて行つて焼けたタンをかけたなりなどして、店構へを始めてゐるのもあつた。

『やつぱり東京は淺草から復活するのだね。今に仲見世が一週間前と同じ繁華の巷になるよ君。何しろ觀音様があの通り残つてゐるだらう。靈顯いやちこといふので、

從來よりも一層信仰されるにきまつてゐる。それに池のまはりへは、すぐに活動の假小屋が出来るだらうし、吉原もぼつ／＼恢復しようし、十二階下だつて、今年中には何とかなるさ。需要供給の關係がすべてを生むからね』

私はそんなことを言ひながら、友人がこのあたりの方々を撮映するのを待つてゐた。今まで死體ばかりを見て歩いた私には、さう言ふことが言へるだけに、心の餘裕があつた。それだけに死體から受けた酸鼻の感じといふものは少なくなつた。

しかし、あの異臭だけは、私の頭をいためてしようがなかつた。そこから厩橋の方へ歩んだ。厩橋もすつかり焼けてゐた。工兵がいま架橋作業中であつた。兵隊さんの警戒線を破つて、何縣かの救護團の白布を巻いた二三十人の一團が、つまり體のいゝ觀光團といふつもりで、在郷軍人の服装が何かで、何も知らずに橋を渡りかけて、ひどく歩哨から叱られてゐた。私たちは寫眞を撮るべくその歩哨に交渉すると、自分では解らないから、すつとあつちの何處とかに中隊本

部があるからそこへ行つて聞いて見ると、横柄な口をきいてゐる。今度はそこに立つたお巡査さんにたのむと、戒嚴令中は軍隊が萬事やつてますからと、無責任なやうな、皮肉なやうなことを言ふ。止むを得ないからこつそり隅の方に行つて、對岸にある横網の安田の邸跡を撮つてゐると、軍曹がやつて来て「おい、君等、えらい人の許可を得たのかい？」とどなる。「得ましたとも」とごまかすと「それならい」とあつちへ行つた。相變らず兵隊さんの頭は單純で面白い。

それから東京電燈の火力發電所は、有名な三本煙突の中、一本は満足で、亭々と三百尺からの空に聳えてゐるが、他の一本は丁度半分どころからへし折れてゐる。もう一本は影も形もなくなつてゐる。三本煙突が一本半煙突になつてゐるのだ。專賣局も、火元の高等工業も、藏前あたりはめちやくちやだ。

十

兩國橋は比較的完全してゐる。人も自由に渡つてゐた。しかしありし日の龜清も柳光亭も、どのあたりにあつたのかさへ一寸見當がつかない。兩國公園もめちやめちやで、公園であつたといふ面影だけがのこつてゐる。向ふ岸の本所一帯も無論焼け野原である。國技館だけが鐵筋コンクリートの外廓と兜形の屋根とを遺してゐる。その外の一切は寂滅だ。

川の中には、無論このあたりにも夥しい死體が漂つてゐる。川の水は一たい、地震以來眠つたのか死んだのか、どんよりと濁つた儘動かうともしない。橋の傍の、川蒸氣の乗場はすつかり焼けて、そこには幾艘かの焼け焦げた舟が浮きつ沈みつしてゐる。死體と一しよくたになつて。——龜清あたりの火が向ふ兩國へ飛んで向ふ兩國の美術俱樂部などの火がこつちへ移つたとか、大川にはギヤソリンその他の油が流れてそれに火がついて一面に燃えたので、そこへ入り込んだ船も人もみんな焼けたとか、泳ぎを知つてゐる人が、とても陸上では焼けて助からぬといふので、

川へ飛びこむと、泳がない連中まであとからあとから飛びこんで、そして泳いでる人の手や足につかまるために、泳げる人も、泳がない人も、一しよになつて十人二十人とかたまつて死んだとか——さういふ物凄いな話はこゝにも多くのこつてゐた。川に沿つて濱町河岸に行くと、馬の死體があつて、その周圍にこれをかこんだやうに五つ六つの人間の死體があつた。それを見てゐると、溝の中に犬や猫の死んだのが放つてあるのと大した差はなく思はれた。人間の死體と馬の死體、むろんどれだけの差もないはずだ。生きて居ればこそ馬と人だ。死んでは一律平等だ。その死にざまと、その與へる印象とは、どう思つても馬と人とを區別づけない。馬もふくれるだけふくれて死んでゐた。人間と同じやうに脱腸もし、〇〇〇膨大してゐた前肢後肢の屈め方まで人間そっくりであつた。——

十一

もうかなり飽きたので、新大橋の方へは行かないで、日本橋倶楽部の前から濱町通りを久松町の方へ行つた。何とかいふ旅館の土藏は、實に用意周到に目塗りがしてあつて、とても中の一物も焼けてはゐないやうに見えた。かういふ土藏はこれまで見當らなかつた。あの大混雑の中で周章狼狽をやらなかつた人が一人や二人はあつたかと思ふと、いくらか氣強くなる。明治座も外廓は残つてゐた。その前に、水道の防火栓から、盛に水が出てゐた。その湛えたところはかなり薄ぎたなく濁つてゐたが、それでも通りがりの人々はこゝまで來るとその水で顔を洗ひ、そしてちよろ／＼と溢れ出る水道の口から水を啜つた。私も口をすゝいで啜つた。まつたく甘露だ。吉原以來の臭氣と、それよりも甚しい塵埃とに、すつかりなやまされた上に、焼けて乾き切つたところを歩きまはつて、しかも飲まず食はずだから、濁を覚えることは甚しいものだ。やつとこのオアシスを見つけたわけだ。『臭いな』とたれかといふ。『あゝ、その溝の中にまだ三四十人ははまつてるとよ』と投げやり

な調子で答へる者があつた。こんなところで！ みんな意外な感じを持つたが、なるほど臭い。『熱くてたまらなくなつて、こゝへ飛び込んだ人たちが、棒杭のやうにこゝに埋まつてしまつて、身動きが出来なかつたんだつて……』『明治座の前へ新しい人柱が立つたんだね』『人柱なもんかね。生きながら自身で塔婆になつてゐるんだ』——さすがに大河端からこゝまで来ると、こんなことを言ひ得るだけの餘裕が誰れの心にもあつた。

哀話のかずく

一 梨の實の洪水

日比谷一帯が人の海になつて揉み返して居た九月三四日頃のことだつた。まだ食糧の配給は行き届かず、或るものは一日の朝食以來食べものも飲みものも口にしたことがなくて、氣の狂ふやうに飢渴に瀕してゐた頃だつた。

或る機敏な山の手方面の果物屋らしいのが、美味さうな梨の實を車一ぱいつんで人ごみをかきわけ、日比谷までやつてきた。平常ならば、そんなものを別に夢中でほしがりもしまいが、時が時、場所が場所だつたからその車の上に衆人の眼が焼きつくやうに注ぎかけられた。

そのうちに一人の或る男が、果物屋の後ろへ廻つて、車の上の梨を黙つて一つ摘

まうとした。果物屋は驚いたに相違なかつた。

「おい戯談しちやいけませんせ！」

その男は一つの梨を置きも、もつてにげもしなかつた。

「買ふんなら買ふで錢を出してから持つて行つてくんねえ。でないと何と怪しまれてもしかたがねえせ」と重ねて嫌味を云つた。それでその男は黙つて梨を置いてしまつた。

ふだんなら何とか一言なかるべからざる群集もだまりかへつてゐた。すると、また一本別の手が梨を掴んだ。

「やい戯談するな！」

果物屋がどなる間もなく、數本、數十本の手が重なり合つて出た。驚いてわめき立てる暇もなく、どこからか出た太い腕によつて梨の車はひつくらかへされてしまつた。途上は梨の洪水が流れた。

今迄この様子を環視してゐた無数の群集があつと押しあひながら轉んでゆく梨の流れの下にうつ伏して捨ひはじめた。かうして果物屋は元も子もなしに空車をひいて返らねばならなかつた。

衣食足つて禮節を知るとは至言だ。餓えたものは食を選ばない。この日の日比谷あたりでは一個の玄米の握り値が廿錢三十錢の値をよんでゐた。或る人は、その群集の中に避難したその知人を訪ねて、數個の大きな握り飯をもつて出かけた。すると何處かの良家の妻君らしいのがしきりにその容れものに目をつけて居たが、たまらなくなつたのか、

「失禮ですがそのお握飯はどちらへおもちになるんでせう。おさし問へなかつたらば一つ下さいませんか？」

と云つてきた。或る人はそれを氣の毒に思つて、やつとの思ひで持つてきた内の一つを與へた。その奥さんは一つの握り飯を子供と分けて涙をこぼして貪ぼり食べ

たといふことだ。こんな話は無数にあつたに相違ない。飢餓と戀愛とどつちが強い
か？ と諸君に尋ねたらば、恐らくだれもが飢餓だ！ と答へたに相違なかつた。
安息日に飢えた弟子が麥の穂をつむのを罪としなかつたイエスキリストは流石に
偉いといつづく思はず居られない。

二 三萬圓の裸男

青山の兵營に逃げた赤坂某町の人の話だ。

ごたごたと避難者の詰めかける中で、食糧の配給が行き届いて非常に満足した。
その中には、下町から来た者、遠く本所深川から生命からく裸でにげてきたもの
がゐて、色々な恐ろしい、惨らしい話に花が咲いてゐた。

その中についそばにゐた汚ない裸の袖切のシャツ一枚の男がゐたが、それは濱町
邊の株屋の主人と云ふことで、一晩明治座よこの河の水につかつて火を防いだとい

ふ話しをした。兩手の指には金剛石入りの白金指輪を二つ三つはめてゐるらしくつ
た。それなのに裸で胴巻き一つそれもまだぶぬれのまゝで如何にも苦しうだつ
た。

「如何です。少し日にはして乾かしたらば？」

その人は一寸した荷物をもつて居たので、清涼着を一枚男に貸してやつた。そし
て關はず裸體になつて、彼れは胴巻を外して、乾かした。その中には厚いノオトブ
ツクみたいな紙幣束が三つあつた。

「かうして、金だけは持つて出ましたがね。家族も雇人もどこへ行つたものか一人
として行衛がわかりません。生きてゐる空はありませんよ」

と他人ごとのやうに無表情の硬ばつた顔をして彼れはぼんやりとこんなことを云
つた。

「第一何か買物をしようと思つても、この札ちやまじめで取あつてくれないし、と

でもお釣銭を出してくれませんかよ』

彼れはすつかりしよげ返つてしまつた。まつたく、九月の三四日まで、金をもつてゐても物を買ふことが出来なかつたのだ。兵營では玄米の半にえ飯を、四斗樽の中に入れて、一ぱいに水を注いだものを、一握りづゝ掴んでは古新聞紙にのせてくれた。常から口のおごつてゐる都會人たちは、飢餓に迫つてゐてもそれが咽喉にとほらなかつた。

さうした間に兩人は色んな話から親密になつた。この裸か男は、ついその日までは數萬數十萬の現金を湯か水のやうに取扱つてゐた。一相場當れば、萬といふ金は這入つてくるのだ。それがガラを食つたところで、永年の經驗で、大ていは切ぬけてやつてゆく。さうして、客筋の損得に關らず、彼れの懐ろはいつも暖かだつた。今度のやうな、大災禍にぶつかると何うして誰れが想像し得やう。

いま、彼れの力とする株式取引所は、何時立會を開始するか見込みはつかかなかつ

た。彼れの手にあつた時價數十萬の株券も、恐らくは金庫の中で灰になつてゐよう。いや、たとへ助かつたところで、その株の多くはとても元價の半分にも達しなからう。いや、それよりも彼れの妻や愛兒たちは生きてゐるのか、死んでゐるのか、一向に見當がつかないのだつた。

四日の朝この三萬圓をもつた裸男は、丁寧に分れのあいさつを述べて、あてもない下町の焼跡へとぼとぼと出かけて行つたのであつた。

三 身代りの寫眞

二三年前から開業した許りの新店の唐物屋の若いお女將さんS子さんの話——
S子さんと夫との間には七八歳の女の子が一人あつた。その店は重に花柳界の人を客に迎へる、賑やかな通りの角店だつた。この年は宛てにしたお盆の商ひも成績がよかつたので、いつにない大奮發で、S子さんのお實家の妹たちやら、主人の

甥や姪を加へた大一座で、一日鎌倉の海岸に賑やかな遠足を試みた。

一九四

このS子さんの夫はまだいまのやうにベタ一面の流行にならない十年も以前から寫真に凝つて、アマチュアとしては一ぱしの自信をもつてゐた。近頃の駆け出しのカメラ黨に對しては一家の識見を高く持して下らなかつた。で、この日も、すつかり其準備をして、カメラをかついで出かけたものだつた。果して快晴で、終日十人近くの大勢が遊びつかれて夕方歸京した。その夕方に近い頃東京驛から下りた同勢が丸ビルの中で晚餐を認めようと、其の大玄關の前を背景にして場面まで、めめて十數枚の寫真を撮つた。これを近所の見知りごしの寫真館にやつて、何枚づゝかの記念寫真の現像と焼きつけをたのんだ。

丁度出来上りの約束の日が九月一日だつた。S子さんは、お午餐前の一寸の間を見て、まち兼ねた寫真をうけ取りに出かけた。その寫真館にはS子さんと同じ位ひの妻君が居たので、話し好きのS子さんは何といふこともなしに、世間談に時を移

してきて、歸らうとして、財布から十圓札を取り出した。それが十一時五十五分前後だつたから、果してぐらぐらと揺れて來たのは勿論である。

あッ！と驚く間もなくS子さんは一散に表てに駆け出した。それと一秒の間もなく、脆い洋館まがひの寫真屋の屋根が落ちて來て瞬く間につぶれた。S子さんは後頭部から左の肩先を半身にかけてさらざらと落ちて來る死のために強かやられて一時は氣が遠くなるやうだつた。それでも生命には別條がなかつた。すると、急に手から置いた十圓札と、それよりもうけとるばかりの寫真に心づいた。くちけて開かなくなつてゐる扉を手元へ力まかせにひくと、そのすぐ奥に寫真屋の小僧がうつ伏せに倒れてゐた。

『おかみさん、助けて下さい』

泣き聲を立て、小僧がよびつけるのを、夢中で兩手を引ばつて、引づり出してやつた。すると、まだ奥の方で、

『助けて下さい〜』と云ふ寫真屋の妻君と子供の泣き聲がしたが、眞暗でそれに色々な崩れかゝつたものに遮ぎられてゐて、一向その見當がわからなかつた。それと同時に家に残した長女や夫の身の上がしきりに案じられ出した。こんな大地震なら家もつぶれてゐるに相違ない！と思つたのだつた。

然し、悲鳴をあげて助けを求めてゐる二人のものを見すてて歸るに忍びなかつた。と、丁度よく三人づれの若い屈強な男が道を通りがつた。S子さんは、

『どうか、この家の下に人が二人つぶされて居ますから、助けて下さい。この小僧さんだけは私が引つぱり出したのですが、あとはくらくて何處に居るか知れませんから、それに私の家が心配で心配で……』

と、訴へるのを皆までは聴かずに三人の若者はそれッ！とその潰れ家の方へ走りかゝつた。S子さんはそのあとが何うなるかを見定めもせず、自宅の方へ駆けて駆けた。果して、家は半潰れにはなつて居たが、夫も長女も無事で戸外に避難して

ゐた。それはよかつたが、つい通りをへだてた向ふの鰻屋から盛んに火を吹いて居た。三人のものは僅かの手荷物をまとめて逃げるには逃げたが、殆んど同時に自宅には火がかゝつて、店中の唐物ものや小間ものがメラメラと燃え出した。

それをみても涙さへ出なかつた。その日は山の手の野原に露營をし、翌日からはR小學校に特にたのんで、宿をしてもらつた。そうして落ちつくにつれて、焼けた寫真のことがしきりに惜しまれた。それは非常にどれもが出來がよかつた。焼いてしまつた澤山の晴れ着や店の商品のことは大して惜しいとも思はれないのに、この寫真ばかりは残念でたまらなかつた。それに、この寫真館の妻君と子供はその後果して助け出されたかどうか、誰れも知つてゐるものはなかつた。

S子さんはこの話を實家の妹たちははじめ逢ふ人ごとにきかせて、いくども繰り返して残念がつた。しかし、あの寫真が無かつたらば、S子さんは潰されて、死んでゐたかもしれないのだつた。

四 帯に浸した河の水

一日の夜日本橋方面の人たちは、火事の焔と烟に追はれて、新大橋の方へ雪崩れをうつて逃げ込んだ。すると、橋の袂には抜剣した巡査が立つてゐた。

『生命の惜しいものは、荷物を捨てて橋へにげろ』と叫んでゐた。それまでは車につんだり背負つたりした澤山の家財をどしどし河の中になげ込んで、橋へ避難した。もう、火は頭の上にかぶつてきてゐた。

大川に架けた五橋のうちでは比較的新しく堅牢な鐵骨づくりの新大橋は一ぱいの人を乗せても危険はなかつた。中央へ中央へと押しつめられた數萬の人々は、只管兩岸の火勢の衰へるのを待つた。けれども、火の旋風は激しい勢で吹つけてきて熱くて堪らなかつた。子供たちは『あついよ〜』と泣き叫んだ。それでも何うすることも出来なかつた。

そのうちに、兩岸の橋の袂に近くゐた人々は、火にあほられて、ばたばた倒れはじめた。中央の方の者もこれを見ては氣が氣ではなかつた。

火で明るくなつた河岸の通りには、衣服や髪の毛に焔々たる火をかぶつた女や男が、駆けて来ては大川の中にさぶりと飛び込む。それも力及ばないで、路上に倒れるのを、火にかぶされて見えなくなつてしまふ。さうした光景をかぎりなく見てゐる橋の上の群衆は氣が氣ではなかつた。

子供たちは焼けつくやうに渴きを訴へてきた。それでも飲みものをもつてゐるものは誰れ一人居なかつた。大人の方も、火に煽られるために、我慢の出来ないほどかわきを覺えてきた。今度は幼いものをなだめ叱るよりも自分たちの方が堪らなくなつた。

すると、氣轉のきいたものがあつて一策を案じた。それは外でもない。腰につけてゐた帯紐の類を集めてきて、そのさきへ同じく女帯を丸めて結びつけ、長く長く

したものを橋に手すりから水面へ落してやつた。やつと水に届いて、一ぱいに河水を含んだ帯の塊りをまた引き上げた。これを巡々に口をつけて滴を吸ふのだつた。一本が成功すると、何人もそれを真似る者が出来た。

さうして、何のまじつてゐるともわからない大川の水を生命の水のやうに甘味く吸つて呼吸をついだ。その間に時間は経つた。そして、苦しい地獄の夜は白みかけた。それを見ると彼れらはいまだに無事で生きてゐる自分自分を感謝したい気分になつた。然しそれと共に逃げ遅れた家族や近親のもの身が案じられ出して、まだ餘焰の納まつてゐないのも關はず、熱くなつてゐる黒焦げの死體を踏み越え踏み越え、兩岸の方へ分れ分れに行つてしまつた。

橋の上でかうした騒ぎの演じられてゐる間に、河の中では火に追はれた人々が、もがき苦しんで、浮き沈みしてゐた。舟といふ舟が火に煽られて、生き残つた人はなかつた。

中に游泳ぎの出来るものは、どこかへ避難しようとして、力かぎり泳いだ。けれどもその周囲にゐる溺れかゝつた人たちが處きらはすがりついて、そのために折角泳ぎの達者なものまで、手足の自由を失なつて、溺れ死んだか知れなかつた。

それをもかき分れて或る者は進んだ。しかし溺れかゝつたものの力はとても防ぎきれないので、突差の氣轉で、深みへもぐりもぐりした。そのたびにあはててすがつた手を放すので、やつと身體の自由を取り返して進むだ。そして橋桁の木組みに取りついて、安全な場所によち上るのであるが、少しでも着物を纏つたものは、それを掴まれるので、これも助かることは出来なかつた。たゞ、まる裸體の人許りがつかまかりかける者をふり放し、ふり放して橋桁に上りついた。さうして僅かの者が助かつた。それも、無數に流れてくる家財道具や流れ木のために、思はない怪我をして、溺れ死ぬ者も多かつた。

五 夜警所の自由大學

火に襲はれなかつた山の手の街々では、流言蜚語と、斷水のための火の元用心とのために、それぞれ結束して町内自警團を組織した。それが町の状況によつて、色々な色彩を帯びた。小商人の多いところでは、商人出の在郷軍人らしい話しにもち切り、三業組合などの國粹會臭味の多いところでは、國粹會式の俠勇に勇み立つてゐた。平素のたしなみで、三尺の秋水を横たへたものもその方には一層多かつた。自警團の取締りは日を追つて嚴重になつてきたが、火のもと用心と、盜賊に備へるために、特に官憲の許可を得て、夜警を每晚つゞけて居るところも少なくない。さうして夜警の人々が毎晩も顔を合せて、共同の利害のために活動してゐるうちに、平素はろくに口もきかなかつた隣近所の人と急に十年の知己も及ばなくなる。これが、當り前の小商人や勤め人の間なら何でもないが、山の手方面には、錚々たる各方面の學者、大學教授、著述家たちまでが夜警の詰所に出張つてくると、その話までが只では納まらなくなる。

また、若い知識慾をもつた青年たちはこれを好機會に、臆面もなく質問を放つて来る。その應答が夜警もそつちのけで、賑やかに夜どほしつゞくので、何のことはない時ならぬ民衆の大學教育が開かれたわけだ。

過激派や、無政府主義の意味さへろくにしらないで『石鹼の革命兒レーニン石鹼』に首をかしげ、デモクラシーを酒場の廣告文とまちがへる連中もないではないが、相當に新聞學問、雜誌學問で鍛へ上げて、國家社會主義が日本の國體と矛盾するかないか、自由民主主義とプロレタリアの獨裁とがどうちがふか位のをきき嚙つてゐる青年になると、平生の心がけて大家連の高説を嚙み分けることも出来る。

そこで、實地の民衆教化の試鍊だと思つたかどうか、滔々と、社會××主義の様式が不完全ながら震火災後の東京に實施されたこと、即ち、食糧と住居を何人に

も無料で供給して、その代償をとらないこと、國家機關が社會民衆の生活を保護して、その代りに勞働がすべての人間の生存の義務であることがこれだ。或る場合には金銭が用をなさないで、與へられる食物で平均に飢餓をしのいで居ることや、富豪も貧乏人も何らの階級的差別なしに、相互に一個の人間として扶助し合ふことさうした生活が決して所謂××主義のお手のものではなく、却つて、立憲君主國である日本でも十分場合によつては實行される可能のあること、それが思想的背景の如何によつて、社會××主義と、國家民主主義との分れるのだといつた具合に噛んで含めるやうに、日本に於けるデモクラシーの本義やら、所謂危険思想の意味やらを語りあかしたものだつた。さうした實際問題を前にした民衆教育がどれだけ効果のあるものか知れなかつた。

また、一層實際的な問題に關して、假令は大通りの家主や地主の若旦那や當主たちがやはり裏の借家人の主人たちと一緒に夜警所に詰めてゐる場合などは、後者に

聞えよがしに非常時の家賃の値下げや、當然それを免除すべきものであるなどの意見を論じ立てると、借家人側の一同は盛んに聲援する。

それを持主側の若旦那たちは隅つこに身體を縮めて黙々と拜聴するやうな奇觀も多かつた。その間に砂糖や菓子や酒類までも寄附が每晚缺かさず、それを煮たり、沸かしたりして、十分腹ごしらへをした上で、まへの議論をつゞけるといふのが常であつた。

これらは極めて眞面目な方であるが洒落ものが多町内になると、飛んでもない猥談を我れ劣らずと競争したし、それも詰らなくなると長い話、死人の話、人殺しの話で、時ならぬ百物語りを始める。また藝事の好きな人の多い町では藝事の話や勝負の話でもち切る。その中にもなるべく悲惨な、生々しい實感にふれる話よりは輕快な、氣のうき立てる話に笑ひを欲するらしかつた。

ある男は、少しくいゝ氣嫌になつて即座の一席、辯じ立てたものがあつた。

『時は大正十二年の秋九月、一日正午に垂んとする五分前、俄然大東京を襲ひ來つたのは大地震でありました。アレと云ふまもなく見る見る大夏高樓は微塵にくだけ老幼男女は西へ東へとにげまどふ間に、焰々と巻きおくる火の手は一瞬にして東京全市をなめ盡しました。残るは見渡すかぎりの荒野原、哀れと云ふも比較べるにものがありません。これをもつて、題しまして東京大震災火災の巻全巻長尺あととは畫面の開展にしたがひまして……』

ある活動辯士の口ぶりそつくりで辯じ立てるかと思ふと、まけずに新派劇の聲色で、即座の震災劇を口演する。地震にちなんだ『地震加藤』の桃山城一番駈けの場を吉右衛門の口せきでやつてのけるやら、賑やかな夜はいつの間にか明けるのであつた。

六 童 謡 の 先 生

震災火災のために、最もみぢめな思ひをしたのは幼い子供たちであつた。それは焼けて家をなくした子供たちは勿論のこと、住居は残つても、親たちは避難した近親知己の世話やら、こわれた家の中の取片附け、生活問題の心配などで殆んど關つて貰ふことが出来ない許りか、お三時や三度の食事さへ十分に貰へなかつた。第一、九月一日以來の地震と、火事と、面白からぬ流言蜚語のために、唯さへ神経質になりがちの都會育ちの子供たちは殆んど夜はをちをち眠るものさへない有様だつた。かれらには、大人が毎日のやうに物語つてゐる黒焦げの焼死人の話や慘酷な〇〇〇〇の實見談などを聞きかちる上に、砂と汗まみれの避難者がぞろ／＼表通りを通るのを見送りながら、子供相應に鋭い不安と憂鬱に胸を轟かせずには居なかつた。その結果、九月四五日までは、いつもなら喧ましいほどの子供の唄ふ聲や、楽しい遊びの笑ひを耳にすることが出来なかつた。それがやつと落ちつくつと彼れらの間には、新しい遊戯か思ひつかれた。それは一つの町内とは限らなかつた。山の手は

どこへ行つても似たりよつたりの仕かたで、それは子供たちの遊びとなつてゐた。その一つは〇〇ごつこで、も一つが避難者ごつこであつた。この二つは、子供たちの眼と耳から直接に來たところの、實感に基づいた遊びで、決して所謂藝術教育の先生の與へるものではなかつた。それだけに野生的で、それに所謂教育の本旨に叶つてはゐなかつた。それでも子供たちは頓着なかつた。最も實感的であることが彼れらに快よいらしかつた。一體教育家諸先生は何と見るだらう？

小石川のある子供向の雑誌ばかりを出してゐる雑誌社五社のそばのごみくただらけの狭い坂のところに、一見して詩人らしい口ひげの男が、澤山の子供達にかこまれて、童謡の音頭をとつた。みんなと一緒になつてうたつてゐた。消えかゝる夕陽が四邊にらばつてゐて、何となく小唄じみた情景の中に、洗ひざらした浴衣の男が一人、汚ない避難者らしい風體のもまじつた子供たちに圍まれて、多愛もなく、モノトリーナスな、メロディをくり返して餘念もない様子を想像して見給へ。決して

それは或るユーモアの味のないものではないのだ。

そこを通りかゝる何處かの會社や官廳から電車のない遠い道を疲れてとぼく歸る勤め人や労働者たちがこの呑氣さうな男を輕蔑を含んだ笑ひをもつて見て通りすぎるのであつた。それでもこの良寛和尚を思はせる童謡詩人は頓着しなかつた

『あの童謡の先生は何と云ふ人だね？ 坊や？』

と子供にきいて見ても、知つてゐるものはなかつた。たゞ、よく來てはうたを教へてくれるをぢさんとはかりで何も知らなかつた。

この童謡の先生はその場所ばかりではなく附近の子供の集まりさうな縁臺や、角の電柱の下などに幾度も姿を見かけた。然し誰れであるかまだ私は知らないのだ。

左様なら！ 童謡の先生。君は可愛さうな子供たちのためにいつまでもお友達で居てみんなの荒んだ精神を和らげてやつてくれ給へ。左様なら！ 私は今諸君と一緒に緒にかう云ふ外はないのだ……。

七 都落ち物語

110

郊外に住んでゐる或る青年の語つてきかせた話である。

彼れは近頃流行の藝術家らしい長髪に刈つて、詩を書き、童話をつくり、文藝批評をものする。彼れは地震と一緒に近所の人たちの話にすつかり不安に襲はれて避難の支度をした。火事は遙かに遠いのであつたが、皆が皆やはり流言蜚語に威嚇されてしまつてゐた。彼れは、子供を妻君に背負はせて、自分は出来るだけの荷物をもつて、自宅を釘づけにして、北へ北へと舊板橋街道をにげ始めた。然しゆくさゆくさが一層混雑であつて、とつても落つける場所がどこへ行つたらあらうとも思へなかつた。

川口町も戦場のやうな騒ぎでどうすることも出来なかつた。そこで、本街道から外れた裏道の方へはいり込んだ。すると茲にも例の自警團が控へてゐて、容易に關

所をとほさなかつた。それに、第一、この青年は川口附近に名ざす知人を持たなかつたし、その美しい長髪が禍ひをして、主義者と疑はれた。それは一ヶ所ばかりでなく、往くさきさきで、喧ましく詰問された。或るところでは、すんでのことで引き立てられようとさへした。すると、丁度そこに居合せた一人の労働者か下級の職工風の男がみ兼ねて口を出して庇つてくれた。

彼れは、此のさきどこへ行かぬでもないで、云はれるのを幸ひこの男の宅へつれられて往つた。それはやはり川口町工場へ通ふ労働者であつて、がつしりしたギリシヤ力士の彫像のやうな逞ましい體格をした男で、口の利き方の齒ぎれのよい、如何にも典型的のプロレタリアートだつた。

『お前さんのそのもちやもちやの髪の毛を切つちまいねえ。そんな風をしてるから主義者だなんて疑はれるんだ』

と、眞向から卒直に忠告してくれた。彼れは云はれてみると急に畏氣づいて、直

ぐに敷はつた近所の床屋へかけ込んで、五分刈りのバリカンで丸坊主にして貰つてきた。

「その方がいくらさつぱりして好いか知れねえや。二三割方男ぶりが上つたせ」かう云つて宿主は大聲をあげて笑つた、

一晚親切なこの夫妻に厄介になつて、彼れとその妻君はまた重い足を引ずり引ずり退窟な遠い路を歸つてくると、自宅は無事に出たまゝの釘附の跡までそのまゝになつてゐた。これなら周章でて都落ちなどしないで落ついてゐた方がましだつたと思つたが、それはあとの祭りだつた。

いやそれよりも色々な恐ろしい噂さがしきりに傳はつてきたので、今になると主義者と疑はれたあの時の恐ろしさがぞつとするやうに身ふるひが出た。同時に縁もゆかりもない自分たちを生命がけで庇つてくれた労働者の親切が感謝をもつて思ひ返された。

もう少し世間が静まつたらば、何を置いてもあの恩人にお禮を云ひに行かうと彼れは口ぐせのやうに云つてゐた。

八 焼け跡の新職業

地震と火事は、流行病と飢餓をみちづれにして矢つぎ早やにせめ立てて来た。焼け跡は、見渡すかぎり何里四方と云ふ荒野原で、行けども行けども家はなし休み場はなし、また、飲み水一滴ないのである。これが山奥か野原ならば清水ぐらゐには事缺かない。また涼しい木蔭、甘味い木や草の實も旅人を喜ばすであらう。

けれども大東京の焼け跡は水もなければ、食ひ物もない。休み場と云つて、焼けた灰は腰を下ろすに堪へない。そこで、何よりもさきに食べものの要求がおこる。一方に焼け出されたり、職業を喪なつたりしたものは、けふからの生活費をむりにも得なければならぬ。それは何と云ふあてもない、何か手近かな商賣だ。何がよ

からう！これと云ふ原料はない。第一資金が乏しい。とにかく金がほしい。

この需要があるところ、供給が生れる。而も需要を十分に充たすまで、この經濟學の原理は吾人をあざむかない、茲に焼け跡の新職業は最も古風な原始的なすいとん賣り、ゆであづきから始まつた。これは最初は一ぱい十錢であつたが、競争者がふえ出してくると、一齊に一ぱい五錢に値下げした。これも經濟學の原理の供給が需要より超過すると、供給者間の競争によつて、價格が低下する。といふそれだ。

今度は期節ものの梨とうれ残りの西瓜だ。それらで需要者の胃の腑が承知しなくなる、白米の配給が出はじめると、牛のぶつかけ飯、ライスカレーが十錢均一で現はれた。さうなると慾望が複雑になるのか、供給が需要者の慾望を刺戟するのか、たちまち、牛井とカレー飯の天下となつた。すいとんは全く顧り見られなくなつた。また、食べものの外に口覆ひのマスクが賣られ、繪ハガキと焼跡地圖がぼつぼつ見えてきた。メリヤス類、古着、足袋の店が開く、陶器と金物と罐詰めを

山の手の方から賣りに出てくる。こうした露店のデパートが九段の坂や上野山下にはずらりと完備してきた。

以上は新しいと云へば新しいが舊態を新しい環境に順應して改めたばかりで何の變もないと云へば云へる。また、自宅の焼け跡のバラックに店を開いた商賣屋も同様だ。

まつたく新しい職業とは何であるか？それには自轉車のバンク直しがある。焼け跡の火薬爆破の請負業が出来たが、これは火薬の取締りがむづかしいので、許可になるかどうかわからぬさうだ。また外に從來の商賣往來にない商賣が澤山出来た。中でも日本の國法の許さぬ（いや恐らくは世界中の人間衣食の規則が認めない）職業でない珍職業が二三ある。

その一つは焼跡の灰がきで、埋もれた色々な貴金屬や、金屑の類を拾ひとるので、まだ秩序の整はない十日以前には至るところにそれを見かけた。その一群が灰を掻

いて、小さな何とも得體のしれない金糞を拾ひ集めてゐる様子は何とも悲惨な感じのものだつた。巡査も憲兵も大して咎めなかつた。

罐詰屋のあとでは焼け残つた罐詰を掘つた。呉服屋や古着屋のあとでは、役にも立たぬ焼けた小袖のはしきれを掻き集めてゐた。それが彼れらの一日の勞力に値しないとは誰れの見目にもわかる。それでも焼け出されて、産をうしなつた窮民には考へて居る餘裕さへもない。

然し秩序の恢復につれて、この珍職業は嚴禁された。恐らく皆なが、自分達の前途について考へてきて、新しい勞働の端緒に就いたのだらうか。

九 蟬捕りの兒の死

山の手の場末の郊外に近い一廓である。その町内に目立つた大きな邸宅を構へた子爵が住んでゐる。その主人はある宮様のお附きとして洋行した高級の宮内官の

一人で、美しい夫人については、妖艶なローマンスが噂されたこともあつた。それらはこの話には餘り關係はない。たゞこの子爵の邸宅の外廓が、可成り年數を経た石の扉で、あとで思へば漆喰も大分脆くなつてゐたらしかつた。

このつい近所に小さな魚屋の店があつた。三人あつた子供のうちで、一番上の女の子はついこの春馬力に轢かれて、無慘な死に方をした。その噂さがやつと消えたところである。夏もすぎ去りかけたがまだ蟬や蜻蛉が澤山残つてゐたので、その下の男の子二人は、學校のはじまる日の近づくのを忘れて、もち竿をかついで飛びまわつてゐた。

九月一日は小學校の始業式だ。あさの中、一寸出て行つたかと思ふと飛んで歸つてきて、また何時の間にか二人とも姿が見えなかつた。兩親はまた例の蟬とりだと思つても、急がしい朝河岸が歸つて來る時分なので、その用意やら、晝の支度で氣にも止めないで居た。

そのうちに晝真近くなつた。丁度その時兄の十一になる方の子供は、M子爵の表門の横手になつてゐる二十間許りの高い石堀の上をいつもものやうに自働電話の箱のうしろの電柱からのぼりついて、身軽るにかけづり歩いて、日中の太陽に照らされて啼きしきつてゐる蟬の姿を茂つた木の葉ごしにさがし求めて居た。それは子供たちにとつては危ないとも感じない。しかも堅固な石の堀の上だから、下から大人の考へるやうに落ちる心配などは毛頭考へてもみなかつたのであつた。

そこに午前十一時五十分の地震の大揺れがぐらぐらと、石堀をゆりはじめた。彼れは眞蒼になつて、とび下りることさへ出来なかつた。下に立つて蟬の籠をもつてゐた八つの弟は、

『兄ちゃん危ない〜』と悲鳴をあげた。

その拍子にゆさ〜と大揺れが来て、將棋倒しにその堀がばたばたと根元から道路の方へ倒れた。弟の方は周章てて飛びすぎつたが、強たか落ちてくる石に足の

甲をうたれて横倒れになつた。氣がついてみると兄の姿はどこにも見えなかつた。その子は足の痛さにしくしく泣き出しながらついその前をみると、堆くなつた砂利山の上に落ちた切石のところどころには、兄の子供のきものが見え、手足が見え血だらけの頭が見えた。すると、弟の方の子は、吃驚したのと、急に悲しくなつたのとでどうすることも出来なく、そこに丁度兄の頭のところの近くの切石に腰を下ろして潜然と泣いてゐた。近所の人の説には兄の子が唯だ其の砂利山の上につて、蟬をねらつてゐるとき地震が来たが、生れて地震のこわさを知らないその子は弟に聲をかけられるのも關はず蟬捕りに夢中だつたところへ石がどさりと落ちて来たとも云ふが明らかでない。

大揺れが納まると家の両親たちが、血眼になつて二人をたづねて来た。いつも遊び場となつて居る場所が其處だつたから、第一にさがしに行つた。

『兄ちゃんはどうした』と駈けてきながら叫ぶと、弟の子供は自分のそばの石を

指して泣きつゞけた。そこを見るといくつもの切石に身體中を壓されて、兄の子供が血まみれになつて死んでゐた。

その可なりな大きさの切石を一つ一つ除けると、子供の惨死體が露はれた。身體は無論頭は横ざまに切石にうたれて、血糊が一ばいに石との間にこびりついてゐた。母親は涙も出なかつた。その内に氣落ちがした。弟の方の子が足先きの痛みを訴へはじめた。

父親はその血の滴たる死骸を抱き、母親はその弟の子供を負つて家へ大急ぎで戻つて來た。さうしたさわざを石の塚の持主である子爵邸では、静まり返つて誰れ一人出て來るものもなかつた。もつとも立關まで餘ほどあるにはあつたが。

さうして死んだ子供の去つたあとには、石で眞二つに割れた汚ない山桐のちび下駄が一足と、いくつにも折れたもち竿とがそのまゝにすてゝあつた。それから丁度砂利山の中央の子供の頭部の當るところは、砂利が半圓形の頭なりに凹んで、それ

に當つたらしい切石の上には黒ずんだ血がべつとり固まつて附着してゐた。それを取りかこんでその日の夕方まで近所の人が眉をひそめてその噂さに耽つてゐた。その倒れた石塚の内部は屈強の避難所になつて、幾組みもの家族が固まつてゐた。そして畏々その砂利山の方を見ては何かひそく話してゐた。

そのうちに下町の慘狀が傳つて來るし、二日三日となつてはこの一人の子供の死どころではなくなつてきた。たゞ彼れは『××町壓死者一名子供男十一歳×××××』と一日の夕方巡査の調査報告簿に控へられたのが終りだつた。

倒れた石の塚は、よほどそのまゝになつてゐたが、つい、先達の廿日過ぎてやつと雇ひ人夫の手で取片づけられた、今度こそは切石の塚は眞平にしてほしいものだ。

十 架空線の綱渡り

これも山の手のある町内のことだ。同じ町内の派出所に勤める巡査を拜命してゐ

たE君といふまだ若い青年がある。この人は生れつきが氣輕るな、快活な、人なつこい性質で、巡回のうちに町内を廻つて、誰れと云ふことなしに殆んど一人のこらずと云つてよい位の輕口の一つもきゝ合ふ仲となつてしまつた。

子供となら、妻君たちとなら、青年となら、中年の主人たちとなら、各々相應した應對と話題をもつて口をきいた。話の合ふ年若な仲間とは、幾時間でも飽きるといふことなしに世間話をした。それはかれにとつて天稟であつて、決して何のたくらむ必要もなかつた。それほど氣さくで、人間が好きであつた。恐らくこのE君と反感をもつたり喧嘩をしたくなる人間は町内に一人も居なかつたに相違ない。

E君は少しの間巡查をしてゐたが、これを餘り好んでゐなかつた。そのうちにいつの間にか官服を清洒な背廣服にかへて、どこかの會社へでも出る様子であつた。

『スパイに轉業したのかい?』など、戯談を云ふものがあると眞面目になつて打消して、ある會社の勤め口を得たので、今迄の警官と云ふ職業は自分の柄にないと白

狀した。相變らず町内の人氣男であることは依然としてつゞいた。勿論獨身で、どこかの二階借りをしてゐるらしかつた。

地震の日だつた。下町の勤め先の會社からすたすた駈けて歸つてきた。それで家の近所が大丈夫と見込みがつくと、見知りごしの家の人たちが廣場をさがして避難するのを手を貸してやつたり、見てきた下町の慘狀を話したりして休まる暇がなかつた。

そのうちに一寸姿が見えなくなつたが、夕方になつて、砂と泥で白服をすつかり汚して歸つてきた。彼れの語るところによるとかうだ――

E君は上野の混雜の中に這入り入んだが人に押されて身動きも出来ない。その間に疲れ切つた女の人や老寄りの荷物を持つていく度となく上野の山へ運んでやつたり、荷車のあとを押してやつたり、力の及ぶかぎり、身體のつゞくだけ働らいた。そのうちに人混みがつつて動くことが出来なくなつてしまつた。彼れはどうかし

て、山をこして根岸か根津の方へでも出て行かうと思つた。

ふいと見ると、頭の上に太い電話の線の電柱があつて、太いケーブルが二三本わたつてゐた。それをみると、何と思つたか彼れは手近かの電柱にするすると昇つた呆氣にとられて仰いでゐる無数の頭の眞上をかれはケーブルの鉛管に兩脚を支へて澤山に渡された露線を手で掴みながら、渡りはじめた。

『危ない、早く下りないと、地震で落されるぞ！』
といくたりかが吐鳴つた。

『はッはッ。大丈夫だ。落ちたら君たちのどたまの上に乗つかるから安心さ』
平氣で戯談で應へながら、幾本かの電柱の間をかうして危ない綱渡りをして通りすぎた。するとその下の邊は歩けないほどのひどい人混みではなさうだつた。そこで、また電柱を傳はつて下りて來た。

さうして、つい夕方にはもとの町内に姿を現はして、その晩から町内の炊き出し

やら自警團の編成やらで大車輪に活動してゐた。

毎日毎日E君は自警團中の活動家であつた。すると一寸の間を見て、名古屋とかの實家に行つて來た。そこから歸ると、僅か一日二日見えなかつたばかりだのにまた疲れた顔もせず町内の事にせはしがつてゐた。

E君は珍らしい現代的の活動家の一つのタイプに相違ない。この一冊の中にも彼の齋らした種話がいくつかある。

十一 焼け爛れて一週間生きた女

京橋邊の外國會社の支社に女事務員監督をつとめてゐるO子さんとよぶ三十四五の女があつた。これも會社員である夫との間に一人も子供がない氣樂な家庭だつた。住んでゐる本所の被服廠近くのある町から、二人とも家を閉めて勤めささへ通つてゐた。

九月一日も例の如くO子さんは會社へ定刻から出勤してゐた。地震が來ると、部下のタイピストや事務員たちを注意して、大體書類を纏めて引渡すなり、片づけるなりして、朝方の雨に皆が用意して來た雨具や合羽の始末までさせて、無事に戸外に出た。その間に二階三階だった事務室から二十人近くの同勢が下りるのに、中には周章で自分でどうしてよいかわからないでゐる年若な女たちを注意して勵ましなからともかく表へ出た。

その頃銀座京橋はまだ火が遙かに遠かつた。勿論仕事は休みになつたので、そのまゝ心配になる自宅へ歸ることにした。

青山の奥の山の手へ歸る二人づれのタイピストのF子さんと事務員のN子さんもO子さんに左様ならを云つて右と左に分れた。彼女たち二人は自宅が氣になる餘り外のことにはわき眼もふらず、せつせと道を急いだ。二人はつい近所で、それに遠い親戚關係の間柄だった。日がたつにつれて、會社が焼けたことはきいてゐたが、

そのあとの仕事はどうなるかが氣になるので、丁度一週間に、會社の立のき先きである帝國ホテルに出かけて行つた。

居合はせた男の事務員の某君がF子さんとN子さんの顔をみるより早く、

『君たち小山君が死にかけて居るよ。何だつたら一寸見舞つてやつてくれないか。さぞ喜ぶだらうに』

だしぬけにかう云つた。その理由を尋ね返すまでもなく、彼れは小山(O子の姓)さんが、一日の午後あれから本所の自宅へ歸りつくと、まだ夫は歸つてゐなかつた。そのうちに火が一面にまわつて大川を渡つてにげてくる餘裕もなくなつたので手近な被服廠の原へにげ込んだ、果して恐ろしい火の旋風が三度も襲つた。O子さんは早く來てゐたのでまん中の方へ押し込まれてゐる上へ、火に追はれてきた人が重なり合つて、二重にも三重にも人間の山が出來た。相憎と下積みになつて、息もたへだへになつてしまつたO子さんはそのおかげで、返つて生命だけは助かつた。その

代り全身に大火傷を負つて、両手などは骨に達する程だつた。それでも氣はたしかで二日目あたりをやつと掘り出されたとき、意識が明瞭で、身元や姓名などをはつきりと救護の人に話した。そこで駒込の〇子さんの實家へ使ひを出して、三日目には無事に歸つてきた。然し容體は重かつた。

この話を聴かされた〇子さんとN子さんはまたうそのやうな氣がしてならなかつた。兎も角もその足で駒込まで歩きづめに歩いて來た。すると、訪ねる家はすぐ見つかつたがそこではへんに静まり返つてそれに取片づけてあつた。

〇子さんの實父と名乗る老人と、夫だといふ三十男があつた。老父は、

『わざわざお越し下さつたが、あれはけさ呼吸を引とりました。折角だから死顔でも見てやつて下され』

かう云つてまだそのまゝになつてゐる病床に案内した。

『あれは死ぬまで氣がたしかで、お社のことやみなさんのことばかり氣にしてゐま

したよ。第一この通りのひどいことになつてゐるのでとても駄目だとは思ひました。が當人が氣がたしかなので、どうも死ぬまで私らもあきらめ切れないでどうにかして助けやうと思つてな……』かう云つて涙を拭いた。

その〇子さんの腕のあたりはすつかり焼け切つて骨まで手で觸れることが出來た。まだ艶々してゐた髪の毛が焼けちぢれて、顔も火傷でみるかげもなかつた。これがあの快活な親切な〇子さんとは二人にはとても思へなかつた。大急ぎで分れて行つた彼女の後ろ姿がしきりに眼にちらついた。

〇子さんの夫は歸らうとして火に追れて、あちらこちら逃げ廻つた末、やつとこの上野に出て、そこから若しやと思つて〇子さんの駒込の實家に廻つて見た。そこにも彼女はゐなかつた。そのうちに三日の朝になつて、はじめて〇子さんの居所が知れたのだつた。

『わたし一人助かつて、これには死なれるし、家は焼かれるし、それに勤めさき

の會社がまる焼でとうとう解散に決しました。これでは折角生き残つても、仕方がありません』

C 子さんの夫が訴へるやうに云ふのに若い二人は何と云つてなぐさめてよいか知れなかつた。彼女たちは心ばかりの香典を置いて、にげるやうにその家を辭して、ほつと苦しい呼吸をついて、顔を見合つた。

十二 新案の火事どろ

不當な利益收得を火事場泥棒と云ふ位ゐ、火事に泥棒は附きもので、しかも可なり實入りの多いものらしい。今度の地震大火について、常習癖のある大盗小盗が、手ぐすね引いてぼろい儲けを働らかうとしたのに相違ない。

あるものは焼け跡の金庫破りで一儲けしようとして怒つた群衆のために殺されたり、半殺し同様な目にあはせられたりした。それほどではないこれはほんの小盗に

屬するものの話だ。

火事で重い荷物を背負つて出た人たちは、少し落ついて來ると同時に、空腹にはなる。疲労はする。荷厄介にして、もて餘してくる。そこへつけ込むのがこの火事泥生である。

もう廿日許りもたつた或日のこと火事にあつた親戚の見舞ひに大きな風呂敷を一つ抱え、四つばかりの子供を背負つて若い女將さんが神田の焼跡の通りを歩いてゐた。

「坊ちゃん、どこへ行きます？ やつぱり焼けましたか？」と聲をかけた見知らぬ男があつた。

妻君は直覺的に不氣味な感じをうけたので餘りよい返事はしなかつた。それでも相手は一層なれ慣れしく寄つてきて、自分は柳島の方から來たが市街自働車や電車を乗るたびにとられて七十錢も費つちまつたからこれからは歩くつもりだとか、こ

こから九段上までは大分あるから荷物をもつて上げようとか云ひ出した。

『ようござんすよ。これんばかりの包みですし、それに私は家を出たばかりなんで疲れても居ませんし、ぼちぼち勝手に行きまますからおさきへあつしやい』

妻君は巧みににげを張つたが、相手はその手にはのらないで、執拗く云つて止まなかつた。さうして二人が互ひに警戒し合ひながら、二三町來る間に、その男は直きそこに立つてゐる劍を附けた歩哨の姿を見ると急にすたすと駆け足同様になつて、ちがつた方向の路へ歩き出した。妻君は愈々怪しいと思つてそのにげて行く後ろ姿の首にかけた風呂敷包みに染ぬきの橋の紋を目印に見送つてゐると何時の間にか澤山の人混みにまぎれて、どこかへ見えなくなつてしまつた。

彼女は行くさきさきでその話しをする。かうした手でもつて、焼け出されの避難者の足弱の女や老人が、荷物をもて餘してゐるのを見ると『一寸もつて行つて上げませう』と親切ごかしにうけとつて、肩へかけるとそれなり、とつとと早足で、人

ごみにまぎれて消えてなくなる。さうした泣き面に蜂のめにあつた人が少なくなかつた。これなどは餘り有難くない火事場の副産物である。

十三 子供一人が残る

下町の賑やかな盛り場の附近に、近頃賣り出した小さなお醫者の家があつた。内科が専門だが、小兒科と一寸した婦人科の診療位には間にあつて、お得意の病家も大分あつた。それに最近は應接間や診療室を建て増したりして景氣がよささうであつた。

地震の日、長男は朝から小學校の始業式に出て、そのまゝ遊んで來るらしく晝飯にもかへらなかつた。あとの家中のものは主人と妻君と薬局の書生と、四つばかりの女の子と一緒に早めの午饗をはじめてゐた。そこに揺れてきた。

わるいことに建て増しをして、いちり廻してゐた爲めか、大分古くなつてゐた家

は大きな揺れに一たまりもなく潰れてきて、二階の下の茶の間にゐた四人ともが梁の下になつて、逃げる間もなく其の場に壓死してしまつた。この近所には一軒も潰れ家がなかつたので、みんなの人がこの醫者の家に集まつて、力をあつめて掘り出しにかつた。

そこへ學校に行つてゐた十歳になる長男が、途中で地震にあつて蒼くなつて駈けて戻つてきた。見るかげもなく潰れてしまつてゐる自分の家のところで呆れてぼんやり立つてゐた。そこへ近所の人が駈けつけて来て、べそを掻いてゐる子供をなだめながら、せつせと掘り出しにかつた。けれども、その間にも揺れ返しはくる。自分の住居の方の事が氣にかゝるしするので、離れも落ち落ち働いてくれるものになかつた。

そのうちにあちこちに烈しい火の手が上つて、それが次第に近づいてくる。それを見ると一層皆なが周章て出した。唯つた一人生き残つた男の子は両親たちがどう

したら助けられるかわからないので、やはり茫然としてゐた。火は近くなる一方だつた。

『坊ちゃん、わたしと一緒に逃げておいで、火が来ると大變だ』

隣りの人がかう云つた。でも彼れは潰れた家の下になつてゐる両親や妹のことが氣になつて、にげる氣にもなれなかつた。

『だつて、だつても父さんや母さんはどうなるの』とくり返して云つた。

隣りの人は皆が皆梁の下につぶされて、到底生きかへる見込みがないし、死骸を掘り出すにも火が来るのでその間がないからとよく云ひきかせて納得させた。さうして、まだ多少未練を残してゐる子供を叱るやうにして、つれて逃げた。

間もなく火はその潰れた醫院の上を覆つた。四人の死骸は壓死した上をまた火をかぶつて家と一緒に焼かれてしまつた。たつた一人残された男の子は生命だけは助かつたが、其後どうしたか聞き洩した。

かうした悲劇は、數多あつたに相違ないが、この出來事であつた町内は潰れ家は他に一軒もなかつたし、焼死者は勿論壓死者も怪我人も一人もなかつた。一家四人の死んだこの家は、町内中の不幸を背負ひ込んだやうに同情された。まだ斷片的な挿話は澤山あるが以上は筆者が直接の見聞に屬するもの許りを列記して見た。

哀れに美しい色々の佳話

一 嬢さま八百屋

震災のすぐあと、東京に最も近い市である千葉にも數々の避難民が身を寄せて哀愁深い多くの物語を止めてゐる。中にも、それらのヒロインとして誰いふとなく、「嬢さま八百屋」と呼ばれる一人のうら若い少女がある。

彼の女はまだ十九歳である。神田錦町の藥種商の一人娘で、海野保子さんといひ家は町内にも知られた富裕さであつたが、今度の地震であへなくも店はまるつぶれ父よ母よといふ間もなく、忽ちに全家に火がまはつて來たので、とるものも取りあへず身一つでのがれ出た。逃れ出たものゝ満都は火の海、おまけに両親や兄弟の行くへもかいもくわからない。三日三夜ばかりは辛うじて上野の山に避難してゐた

が、さて何處へ何う身を落ちつけてよいのか、世間知らずの彼女には一向あてがなかつた。とつおいつ考へ抜いた揚句、かの女が去年まで府立第二高等女學校にゐた間、姉妹も及ばぬ親しい仲であつた某女が、千葉縣千葉郡都村の豪農に嫁いでゐることを思ひ出した。あの方ならば！ と、かの女は希望の眼をかゞやかして、とにかくそちらへ歩をむけた。數日間飲まず食はず、おまけに奔命につかれてすつかり弱つてゐた身を、やつとのことで目的地へまでたどりついたのは五日の夕ぐれであつた。

果して友は親切であつた。友の夫なる人も非常に同情してくれた。彼女の両親は恐らく地震に壓しつぶされてゐるであらうけれど、せめて家族の一人でも様子がわかるまでは、ゆつくり落ちついて一つ家庭 人となつて居るやうにと、眞心をこめて勞はつてくれた。かの女は今更に深い友情に泣きながら身を寄せた。けれども、厳格な家庭に育つたかの女は、此の儘で安閑と此の家の居候たることは何うしても

出来なかつた。ひそかに彼女は友に心を打ちあげた。そして友の強いて止めるのもきかず、友の家の園で出来るいろ／＼な野菜を分けて貰つて、毎朝雨の筈に入れて肩にかけ、露のまだ深い頃から千葉市へと賣りに出かけるのだ。

『茄子はいりませんか、大根はいかゞ』

と呼びあるくその聲が、ひなには珍らしい都ぞだちの洗練さで、しかも物練れないいた／＼しい調子は、忽ちにして市民の耳をそばだゝせた。そして誰れ傳へるとなく、彼女のあはれな境遇は、甲から乙へと知れ渡つた。一週間も経たないうちに『嬢さま八百屋』は千葉の話柄の一つとなつた。今日もあの八百屋さんのを買ひませうと、誰れもかれも、彼女の來るのを待つた。そしてその美しくもけなげな少女の、肩にかけて來た物を、あふるゝ同情の涙をそへて買つてやるのだ。

彼女は斯うして、賣り上げ高を貯蓄しつゝ、迫りくる冬の仕度と、女手一つで何とかして一身をさゝへるための用意とにいそしむと共に、午後は大抵東京に出でて

見失つた家族の身の上を探しまはつてゐるといふ。

二 紹介所の若き婦人

出る人、入る人、叫ぶ人、走る人、まるで戦場のやうな東京市役所の正門を歩いてすぐ右の、戦線の第一歩に机を据ゑて、群がり集まる求職者の身の上相談の男女をば、またたく間にてきばきと片づけて、美事な處理ぶりを見せてゐる美くしい人がある。岡谷多喜子さんといつて、今年二十二歳。右の袖に府廳の赤い布を巻いて絶えず笑ひ顔をつゞけながら、鉛筆で繪圖をかいいたり、見てゐても眼の廻るやうな忙しさ。他の役所の多くの人事相談係が、老いぼれてぐづくしてゐる人の多い中に、花のやうに匂つた此の婦人は、萬緑叢中一點のやさしさをみせると共に、その仕事ぶりの鮮かさが殊に目立つ。

岡谷さんは大阪清水谷高等女學校の出身で、四年前に友人をつれて神田驛下の職

業紹介所へ行つてから、この職業紹介の仕事に特別な面白みを持ちだして、東京府が職業紹介所の婦人部を始めた時、やつと十九歳の若さを以てその方に勤めることゝなつた。それ以來今年でもう四年、この仕事をやつてゐる。

岡谷さんは語つた。

「こゝに斯うしてゐますと、本當に涙の出るやうな人ばかりが、毎日やつて來ます。震災後はほとんど毎日二三十件宛まともめますが、何しろ今のところ労働より外に仕事がないので、求職者にその事を話しますと、大抵はそれでもよいからとは申されませんが、やはらかさうな手の方や、弱々しい人はとてもお氣の毒でその方へお世話なんか出來ません。いらつしやる方があまりお品のよい人が多いので、詳しく身元をおたづねすると、師範學校を出た學校の先生だの、大學を二年までやつた方だの堂々たる會社員の方だのといふので、労働でもよいといふお心を察すると、ほんとうに貫ひ泣きをさせられます。

昨日も日本橋に大きな商店を持つて盛んにやつてゐられた主人公が、女中を四人ほどつれて來られました。自分も焼け出されたので、この際、私は勿論のこと、家内も子供も一家みんな働かすことにしたが、今まで使つてゐたその四人の女中は他人の娘だし、何れも郷里へ歸りたいが、今すぐといふわけにも行かぬので、それまで何處かよいところにお世話をして貰ひたい。自分はあきらめて労働を始めるが、その娘たちにはそれはさせたくないからとのことでした。女中さんたちもみんな泣いてゐましたが、私もこの主人の温かい心には、涙なくして聞いてゐられません。しかしさしあたり女中さんのいるやうなところもないし、私もいろ／＼考へまして、罹災民の炊き出しを手傳ひながら、食事だけはそこでお取りになるやうにきめまして、いづれ適當な口があつたらと思つて居ります』

此の話の中にも、用件の人とはあとからあとからとやつて來るので、岡谷さんは、よつく聞いてはそれ／＼の處理をしてやつた。残暑の激しい午後の日、岡谷さんの顔にいたいほど照りつける。

三 犠牲となつた模範訓導

今回の震災には、松本訓導や小野訓導のやうな教育美談は數あるだらうが、中にも落ちくすれる大木の下敷となり、笑つて教へ子を助け、その犠牲となつた最も壯烈な老訓導の美くしい殉職美談がある。——神奈川県愛甲郡煤谷小學校の訓導で同縣萩野村新宿の人、星野保次郎(五七)氏がそれである。煤谷村では丁度あの大地震のあつた日が鎮守の大祭として、男女五百數十人の兒童は楽しい祭日をば、いづれも着飾り、校長加藤福松、訓導星野保次郎氏外十數人の男女教員につれられて、祭の擧式に參列してゐた。同村は縣下で最も交通の不便な山奥として、式が終つて一といよ／＼歸校しようとした途端、大地震鳴動し出し、兒童はばた／＼と將模倒しになつた。そして空からは一抱へもある古木の枯枝がやたらに落ち、危険この上もな

い。各教員は必死になつて児童をかゝへ、安全地帯へ避難せしめたのである。

星野訓導も、よる年波を打ち忘れて、教へ子大事とばかり多数の児童を助け出し残り幾人かを救ふべく駆け出した刹那、二百餘貫もある大きな枯木が中程からぼきんと折れて倒れかゝり、あはれ二人の児童はその下敷とならうとした。それを見た老訓導は、われを忘れてとび込み、二人の子供を兩腕にかゝへ、後へ押しやつた。時は遅し、その大木は無残にも老訓導の頭上に落下し、頭蓋を粉碎してしまつた。助けられた二人はふと頭を上げると、先生が眞紅に染まつてゐるのに氣づき、その場に昏倒してしまつた。子供等はあとになつて蘇生したが、遂に老訓導のみはそのまゝ歸らぬ旅に立つたのである。

星野氏は十九歳の時小學校教員檢定試験に合格し、爾來郡内に三田及び宮瀬小學校等を歴任し、教職にあること四十年、模範教員として郡長縣知事からも表彰されたことがあるといふ。先生に教へられた村の有力者は、村葬にすべく決定した。な

は遺族の未亡人安子(四七)さんは、長男悦(一九)次男克己(一七)次女鶴子(二六)三女重子(二二)四女露(一四)みどり(一二)由紀子(九)美光(五)の、澤山の子供をかゝへ、長男は病氣で醫者に通ひ、生前星野氏は利欲の念に薄かつたので貯金もなく、安子さんも眼病で苦しみつゝあるのだから、此の子女を、女の細腕一本でこれから何うして育てゝ行くかを案じられてゐる。

四 焼死した富川町の小父さん

富川町の小父さんといへば、東京市内の労働者で知らぬ者もないほどに慕はれてゐた深川區扇橋警察署の巡查小野塚與八氏も、とうとう今度の大火の犠牲となつてしまつた。同氏は大正四年に巡查を拜命し、最近まで深川區富川町から猿江裏町の細民労働者町を擔任して、かれらの氣の毒な生活状態を調査し、心からその境遇に同情を寄せ、温かい心で救護誘導の道を講じてゐたのである。そのためあの邊の

勞働者や細民たちからは、まことの慈父としてつねに慕はれ信服されてゐたのである。これによつて本年三月、時の赤池警視總監から善行を表彰されたほどであつた。

一日、大地震の際には、自分の家族よりも富川町が氣にかゝり、取るものもとりにあへず家を飛び出して、ほとんど丸つぶれになつてゐる同町にかけこんだ。そして同町三十一親方大寅事平井寅吉の子分二十一名をひきつれて、決死隊を組織し、梁に壓され屋根に潰されて助けを求めもの六十餘名を救助して、一旦これを本所區林町二の八十九矯風會のあき地に助け出すことができた。

かくしてほつとする間もなくであつた。一日午後四時半ごろ東大工町から上つた火は東洋紡績に延焼し、またゝく間に富川町と猿江裏町一帯を猛火に包んでしまつた。小野塚氏はこれを見るや棄てゝは置けなかつた。己が危険を忘れて幾度となく大火の中に入出し、數千の避難者に逃げ道を示し、伊豫橋から安全な方面へのがれしめた。當時自身はすでに數ヶ所に大小の傷を負うてゐたが、更に意に介するところなく、再び引きかへして救助につとめてゐる中、官服に火が移つて燃え出してゐるので、伊豫川に飛び込んで火を消して、更に森川町方面に上陸し、河岸の避難者を救はんとする際、大旋風が起り、つひに火焰に包まれて壯烈な最期を遂げたのである。小野塚氏の家も勿論全焼したが、妻かな子は辛うじて死をのがれたので、二十日、大塚原庭署長の報告により、警視廳では手厚くその功を賞し、遺族をなぐさめることにした。

五 健氣な娘へ殿下の御言葉

麻布第三聯隊附の秩父宮殿下には大地震の翌日から他の將校と同様に聯隊本部で御泊りの上、市内の警備に活動遊ばされてゐるが、殊に同聯隊の兵卒の殆ど凡てが災害地域の出身者なので、非常に兵卒やその家庭の上を心配され、親しく本所深川を始め各方面を何回となく巡視遊ばされ、最も慘狀を呈した被服廠あともでも御視

察になつて兵卒等がいまだに家をかへりみられぬのを御同情あらせられてゐる。去る十二日の夕方、この第三聯隊の營門に、第十中隊の兒玉上等兵に面會を求めて來た見るからに哀れな姿をした可憐の娘があつた。娘といふのは上等兵の妹で、本所相生町の實家は丸焼となり、五人の家族は散りくりに分れて、行く方さへ知れず、何れも被服廠跡で焼死したものとあきらめてゐた矢先、ひよつくり兵營の兄をたづねて來たもので、二人はきびしい軍規も何も忘れて、しばしは抱き合つた儘うれし泣きに泣いて、なみろる將校連も思はず貰ひ泣きしたといふ。そしてこの可憐の妹は、矢張り家族と共に被服廠跡に避難したのであつたが、あの猛火の中に尙ほ二人の小さい弟妹をかばひながら無事に逃げおふせ、現在は寺島小學校に救はれてゐるのだ。

この事が、ゆくりなくも秩父宮の御耳に入つたので、殿下は此上もなく同情され早速十六日にはこの兄妹を親しく御前に御呼びになつて、ねんごろにおなぐさめに
なり、當時の事情を精細にお聞き取りになつた。兒玉上等兵の家族は、以前から心臟病で弱つてゐる母の外に、父と、當の妹、静子(十八)美和子(十五)宏(十一)の六人であつた。丁度大地震のあつた日、兒玉上等兵は野營演習の慰勞休暇で本所の家へ歸るため兵營の門を出たところであつたので、取るものもとりあへず空を飛んで我が家に走つたのである。所が本所は火につままれて近寄れず、涙をのんでその夜は數寄屋橋の公園であかし、翌朝人の噂で上野方面をさがしたがわからず、その中夕方六時の歸營時間が迫つたので後ろ髪をひかれる思ひで重い足をひきすりつゝ、兵營に歸つたのである。

それから二日後、特に休暇を得て、残つた病院といふ病院を、片端からさがして歩いてゐると、奇蹟にも父が負傷して大學病院にゐるのに遭遇した。しかし妹たちの行く方は依然分らなかつた。父も勿論、子供たちと共に被服廠あとに逃げ込んでゐて、危く助かつた一人であつたが、妹たちの消息はやはり知るべくもなかつた。

しかるにその妹が前記の通り、けなげにも二人の弟妹を助けつゝ、この焦熱地獄の場所から九死に一生を得て逃れ出で、兄を營門に訪ねて来たのである。三萬に餘る焼死者の中、僅かに生を得た五十餘名の中の數人として、母をのぞく一家族全部が助かつたとは、まつたく奇しき運命であつた。宮殿下には、一分始終を御熱心に洩れなく御聽き取り遊ばされ、今更のやうにその奇蹟的に生を得た、健氣な娘の縋帶した顔を見つめられ、しばしばお言葉もなかつたといふ。

六 飛行機の大活動

墜落するものと相場がきまつて、とかく馬鹿にされがちであつたわが陸海軍の飛行機も、今度といふ今度はいの一番の殊勳を立てた。實際、飛行機の活動はめざましいばかりであつた。まづ、地震と同時に陸軍では、直ちに所澤まで自動車走らせ、飛行機をば日光田母澤の御用邸に飛ばして、天機を奉伺した。その時、某々の

二中尉は、半潰れかけてゐる格納庫から飛行機を引き出すや、直ちに機首を東北に向けてまつすぐに日光へ飛んで行つた。そして御用邸の上を數回旋回しつゝ、『御異状なくば旗をふつて下さい』と記した紙片を圓筒に入れて、三個を御用邸の御庭に投下した。やがて、御用邸からは、どなたか庭に出で、三回日の丸の旗を御振りになつたので、こゝで何等の異状なきことを知り直ちに所澤に引つかへし、時を移さず攝政宮殿下に御報告申しあげた。殿下の御よろこびは勿論のこと、これによつて全國の臣民は衷心より安堵することが出来た。

それと共に、一方飛行機は大阪に飛んで行つた。そして東京横濱の大震災をその日の午後の中に詳報したのである。この詳報によつて、關西各地方はもとより、世界各國に通信されたのである。この勇敢な任務を全うしたものは、實に波多野中尉と同乗者東、中村兩上等兵等であつた。またその夜戒嚴令の發布と共に、軍隊に出動をつたふべく、午後六時五十分所澤を出發して、佐倉、宇都宮、高崎の各聯

隊へ飛んで、何等設備のない土地へ夜間着陸の大冒険をやつて、あつばれ任務を全うしたものに秀島中尉、小川中尉、正木曹長等の猛者がある。これは帝都の警戒の爲めには非常に役立つたので、この爲めに各聯隊は直ちに戦時武裝を整へ、二日の午前中にはすでに東京に入りこむことが出来たのである。

それから又二日はまだ全市が焔々として燃えてゐるにかゝはらず、早くから空を飛んで數臺にて偵察の任務につき、横濱、千葉、静岡地方等の被害状況をも偵察して、ほとんど決死的の飛行をやつたことも非常に効果があつた。今、各飛行隊の飛行機が、とんだ時間と距離とを延べにして計算してみると、二百五十六時間十七分で、一時間平均一七〇キロとすると、その飛行距離は四萬三千十キロ、約二萬七千マイルで、地球の周圍二萬千六百マイルを超えてゐる。即ち二三日の間に地球を一廻り以上する大活動をやつたのである。従來はちよつとした長距離飛行にも故障百出し、その上多數の犠牲者をさへ出したのであるが、今回の陸軍飛行隊の大成功

はほとんど奇蹟的で、これ程の大飛行に三島で着陸の際一操縦者が重傷を負つたに過ぎなかつたのである。『死を賭してかゝれば鬼神も避けるさ』と陸軍當局の大得意もさる理由がある。海軍飛行機も無論これに劣らぬ活動をした。民間の飛行隊も、救護、通信等のために、補助的の活動を怠らなかつた。たしかにこれによつてわが飛行界に一新時期を劃するであらう。

七 山岡行刑局長のお手柄

司法省の行刑局長山岡法學博士には、今度の震災に當つて人に知れてはチト困るやうな秘密のお手柄話がある。此話を知つてゐる省内の幹部連は頻りと博士をほめちぎつて、巢鴨小石川の一帶が火事から免れたのは、全く山岡の力だとまで云つてゐる位である。時は大地震のあつた一日の正午、巢鴨の監獄は二丈もあるかと思はれるやうな赤塚が、三四箇所目茶／＼にくづれ出し、獄舎はあちこちが落ちかけ

て、一千に餘る重罪囚人、それに五百餘名の輕罪囚を加へ、ザツと二千人近くの囚人が、地震を合圖に待つてましたとばかり、ドツと関の聲をあげた。

其の時監獄を開放するかせないかについて、刑務所には忽ち激しい議論が沸騰し同所からは司法省に自動車飛ばして、山岡局長に命を仰ぐことゝした。博士は言下に使の者を叱りつけながら、丁度燃え上つてゐた警視廳や坂下門あたりの火事を指し、あれを見ろ、出すも出さないもあつたものでない。危ないこんな時に出したが最後、市内は勿論山の手までも丸やけた。監房を破らうなどかかるとかあるものがあつたら打ち殺せ。と嚴命した。自動車は又風のやうに歸りついて、此事を刑務所長に通ずると、同所では即時に武裝を整へて非常警戒に當り、三度目の関聲の擧がつたときは、廿餘發の空鐵砲が打放された。

流石の囚人達も之れには魂消たらしく、彼等は銃聲を聽いて脱獄者が皆殺しにされるかと勘違ひしてか、最初の騒ぎはどこへやら、それから三回五回十回と地震はいくら續いても、監房を破らうなどゝする者は一人もなく、どれもこれも猫の子のやうに縮み上がつて、一人の脱獄者もなかつた。巢鴨町池袋一帯から、小石川の大半が放火の厄を免れたのは、全く山岡鬼局長のお蔭だと省内の評判は大したものだ。

八 火中で奮闘した人々の佳話

近衛師團では、今度の震災で一身一家を顧みずして、社會公共のために奮闘した勇敢な人々に付き調査してゐたところ、約百名に達し、その内から更に左の數名を選抜して、その行狀を文書にしたため、桑田侍從武官を経て攝政殿下に献上した殿下には十八日近衛師團管下の救護狀況を親く御巡閱あそばされたみぎり、これ等の人々に特に調を賜ひ、その行爲を表彰あそばされた。

神田佐久間町二三丁目及び平河町の一部、即ち神田川筋の一部が焼け残つたが、それは同町の作間耕逸代議士及び魚住豫備中尉等が中堅となり、土地の青年團、

在郷軍人團を集め奮闘した賜で、且つ逸早く神田川倉庫から白米一萬二千俵を出し、市に提供した、下町の罹災民の口に真先に入つたのはこの米で、作間氏等の機智の賜である。(近衛二聯隊前で賜謁)

浅草區新旅籠町一七醫師小野養治氏は、自宅が焼失したのに拘はらず市から醫藥を分けて貰ひ、獨力で五日から十五日迄藏前專賣局跡に救護班を組織し、七百人の人を救つた。(近衛第一師團司令部前で賜謁)

南葛飾郡寺島町長有馬秀雄氏は、自己の米味噌衣類を持出し、負傷者に手當を加へるなど、約五萬人を助けた。(第二聯隊前で賜謁)

日本車輛製造東京支店副支配人深間内吉藏氏は、枕橋業平橋が破壊して交通杜絶となつた際、軍隊を助けて逸早く架橋に従ひ一般交通の便を圖つた。(第一聯隊本部賜謁)

在郷軍人浅草分會 長二等軍醫向山軍次郎氏は、自宅の全焼も顧みず、二日から

衛生試験所焼跡で四百人の負傷者を看護した。(同上)

第三聯隊吉澤少佐指揮の一大隊は、猛火の間に奮闘、第一衛戍病院類焼を免れしめた。(少佐以下全員第三聯隊本部前で賜謁)

第十三師團衛戍病院附一等軍醫五味幸雄氏は、妻が死産して重態、自分も風邪で發熱甚だしかつたが、非當召集により病を冒して、七日新發田發王子町で避難民の手當に従ひ、十三日朝遂に咯血して重態に陥つた、僚友は病床を訪うて表彰の事を傳達した。

千葉衛戍病院附二等軍醫藤田近二氏外十四名は、二日飛行機より命令を傳達され直ちに同地出發、龜戸から猛火をくゞり辛うじて須田町に出でたが、本所被服廠跡の慘を聞き、二日午後十時美倉橋附近鐵道省寄宿舎跡に救護班を開設し、目下は兩國國技館内で醫務に従事し、晝夜兼行數千人を救つた。(第一聯隊前で賜謁) 尚ほ第一師團管下でも表彰者の調査をした。

騎兵第一聯隊一年志願兵池田國武氏は一日午後七時半麴町分隊の補助憲兵として、同僚十名と共に永代橋監視のため、糧秣本廠についたところ、越中島で数千名の避難民が猛火につままれてゐるのを見、二日午前十二時商船學校新佃島北岸にこれを移動させたがこゝも危険になつたので、禪一黠の裸體となり、軍刀軍服を地中にうめ、材木の上に布團を重ね、これに水を注いで防火壁とし、女、子供を避難せしめた上、自分は數丁を泳ぎ、濱離宮に上陸して三日午前六時危急を第一聯隊本部に告げた、同聯隊がかけ付けた時は部下二名は行方不明となつたが、防火壁の爲數千の人は達はことごとくたすかつた、この勇敢な働きは第一師團長から十九日戒嚴司令官に報告された。

慘害餘録

一 入道雲

地震の當日、むくむくと眞白な入道雲が、火事の烟のうしろに湧き上つた。その怪異な、凝つて動かない積み綿のやうな雲の山が、夜に入つても消えないで、眞赤に火事の色を反射してゐた。この入道雲がみてゐるものの不安な心を一層鋭い不安と驚怖に導かすにはゐなかつた。

「何でせうな、あの雲は？」

と口々に云つた。何時焼けて來るとも知れないので、遁げる仕度をして、餘震を恐れるので、街路や庭さきに避難してゐる人達は、いくたびとなくこの雲を見あげた。それは伊豆の大島が爆發した噴烟だらうと云ふものもあつた。また海底火山が

破烈して、水蒸氣を噴出するのだらうとも云つた。

然しそれは今だに正確なことはわからない。地震雲！と誰れいふとなく云ひ出した。この雲の印畫を高く賣り出してゐる寫真屋があつた。然し誰れ一人この雲の正體を掴んだものはない。

簡單に火事に伴ふ水蒸氣やら、烟やらではあるまいかと云つてしまふ者もあるが、その時の様子では決してさうは見えなかつた。あんな純白な、然も固形體のやうに重く、凝り固まつた入道雲の壯觀を見たことはない。それは、はじめは夕立雲だらうと、しきりに天氣を氣遣はれたが、いつもの夕立雲のやうに、青空を覆ひかくさうともせず、天心に近く頭をもたげたその儘いつまでも動かなかつたのだつた。そのうちに夜に入つても相變らずだつた。その夜どほし、殆んど姿をかへずに、焼け残つた街の人々を威嚇した。

世の中に天變地異にともなふ怪異を語り残された例は歴史には多いが、それを私

たちは昔の人の迷信として笑つてゐたが、この地震雲におびやかされながら、終日終夜をふるえながら佇んだ經驗のある者にとつては、あの何とも云へぬ不安と恐怖の入れまちつた心理こそ、迷信を生み、流言蜚語を生む母胎に外ならないと思はれるだらう。

人間の精神は物質的條件に絶対に支配されるのだ。あの地震と火事に襲はれた市民の心に、何かの暗示を與へたら、どんな荒唐無稽な噂さでも本當にされたに相違ないのだ。恐ろしいことではないか。

地震雲！それは前古未曾有の大異變の象徴であるやうに思はれてならない。然もいまだにあれがたゞの夕立雲の一種とも、噴烟か水蒸氣の奔騰するものとも、一向正體が明らかになつてゐない。考へれば考へるほど怪しい。ぶきみな大震火災の象徴のやうな地震雲である。

二 流言蜚語の一例

『母ちやん、いま交番にまた大地震があるつて、はり出してあつたつてよ』
かう云つて近所の子が飛び込んで来た。まだ地震から三四日目のことだつた。市中の餘燼は燃え残つてゐた。

その子の母親は勿論、近所合壁ではまた野宿の仕度をしなければなるまいとさわざ出した。地震と云へば火事の心配を伴ふのだ。何うしたらこの上の災厄を堪へ忍ぶことが出来よう？ と誰れしも一種の捨てばちに近い氣もちを感じ出した。

然しそれは全たく根も葉もないことであつた。なるほどその日交番の壁には氣象臺の報告として『餘震は次第に終熄し、今後大地震は絶對になかるべし』としたビラがはりつけてあつた。それを誰れか見誤まつて、そのまゝ口傳へに行くうちにあるかもしれぬが、あるだらうになり、何時の間にか、あるに相違ないに變化して

しまつた。

それが一町とへだたらない場所ではなしだつた。かうした甚だしい奇怪な出来事が幾度くり返したか知れなかつた。九月一日の晩あたりは在郷軍人の帽子をかぶつた男が、

『今夜の六時に大地震がありますから、にげる仕度をして、何るべくなら××の原へ出て下さい。警視廳のお達しですから間ちがひありません』

かう云つて軒別にふれて歩いた。一體大地震がくり返して襲つて来ないことはたしかだし、来る筈の別の大地震をも豫知する機械があるとも聞かないし、たゞの餘震ならいざしらず、さうした筈がどうしてあらう。然し警視廳の達しであるとするば相當な根據のある確かな筋から出た警告に相違ないと思はずにはゐられない。そこで六時の時間の近づく頃は誰れ一人家にはひつて居るものはなかつた。然し小さい餘震の外にそれらしいものは七時になつても、八時になつても来なかつた。

すると、今度は十二時にまた大地震が来ると、ふれて歩くものがあつた。折角落つきかけた人たちがまたあはて出した。然し勿論何ごともなかつた。

また火事の近づいて来るといふ噂さがいく度まことしやかに云はれたか知れなかつたそれだのにいつも火事は丘陵の向ふの又向ふの丘陵の彼方で烟をあげて居るのだつた。

さすがに巡査は大ていは冷静で、そんな噂さを一つも承認しなかつた。然し巡査の方には正確な報導をもたらず一切の連絡が断たれてゐたので、たゞ平生の職務から来る経験で、大ていは誤りのない観察をしてゐた。それでも、一般人の方では却つて流言蜚語の方に一も二もなく動かされた。そして、落つきを失なつた彼れらは全たく何かの暗示で盲動してゐるやうにしか思はれなかつた。

もう少し冷静だつたらば、もう少しは何とかなりはしなかつたかしら？ 地震は兎もかく、火事のための惨害を何とかもつと少さくて食ひとめることが出来たので

はあるまいか。

三 流行歌と落首

幸田露伴氏は古來の凶變と當時の流行歌のことを比較して叙述したあとで、今度の災害は、その以前に流行つた『私は川原の枯薄』おなじお前も枯薄』といふうたが昔風に云へば前兆とみられると書いてゐる。この流行歌の哀調は亡國的頹廢の風を帯びてゐる。

この災害後の人心の復興氣分に伴ふ、新しい流行歌はどう云ふ調子で現はれるだらうか。それはともかく、こゝにも昔の落首風の諷刺的のうたを二つばかり、筆者が耳にしたまゝに採録する。その一つは『無い無いづくし』と云ふのである。

一、無いものづくしで云はうなら、

東京名物跡もない、

- 安田の善さん家がない、
- 大倉喜八さん骨董がない。
- 米に醤油に味噌と鹽、
- おまけに水道に水がない、
- 働らかうにも職がない。
- 二、あるものばかりをかぞへたら、
- 山の手方面家がある、
- お堀にくさつた水がある、
- 鐵筋コンクリートの殻がある。
- まづいすいとんゆであづき、
- カレーライスが二十錢、
- それでもバクツク奴がある。

- 三、あつてないものならべたら、
- 車庫にサボつてるボロ電車、
- 芝浦海岸米の山、
- 日本銀行金の山、
- それで食べるに米がない、
- 保険銀行に金がない、
- 市内省線電車がなし。
- 四、まだまだおかしなことがある、
- 亡者がはだかで文なしで、
- 和尚さんお布施が貰へない、
- 六道銭さへもつてない。
- 生きてる名ばかり腹ペコで、

「おいらは働らく仕事がない、

これちや全たくやり切れない。

東雲節の替唄でも二つ三つ出来てゐる。

「今日は帝劇明日三越とこがるる何トシヨ、みんな丸やけ、アラ困つたあ、どう

しましよてなこと仰言いましたね」

「三井三菱千萬圓出してこれでも何トシヨ、ホンノ儲けた端た金驚いたね、てな

こと仰言いましたね」

「會社焼かれて仕事がなく困つた何トシヨ、人夫募集で出てみればネ、満員で

お断わり、てなこと仰言いましたね」

「後藤新平さん復興院長に納まつてナントシヨ、東京これから立直しねホンマニ

ね頼みますよ、てなこと仰言いましたね」

「揺れて焼かれて裸にされて焦るゝナントシヨ、好いたアノ子に死に分れ東雲の

明けの鐘、サリとはつらいね」

また外に悲哀の調子の勝つた綿々の情緒をうたつた吉原情話「片羽鳥」被服廠哀

話「孤子の涙」勇壯活潑な「焼け跡の歩哨兵」、新曲琵琶歌「相生署長の憤死」とい

つた類が筆者のノオトに書き止めてあるが、ここには餘り餘事にわたるのを恐れて

すべて割愛して置く。

落首といふ無名の市井人の手に成つた創作位の生活についた、生活そのものと調

子を同じくした文藝はあるまい。今日のやうな變態的の社會状態では、落首子の

活動すべき餘地が十分にある。敢へて、同好の諸君の奮發を期待したく思ふ。

四 新米の露店商人

勤めてゐた會社が焼け出されて、職を止められたS君が、早がはりの露店商人になつて、場末の町に店開きをした。商品は震災紀念の畫帖とエハガキを割安で、あ

るところで分けてもらつたのだつた。

店を開く前の晩はポスターを書いたり、店の飾りつけの模様を工風したりして大
意気込みだつた。何だかあるだけみんな一日で賣れ切つてしまひさうにもあれば一
冊も思束ないやうにも思へる。まづ學年試験に臨む前夜の中學一年生の心理状態だ
つたと同君はあとで語つた。

その朝は可成り早くから起きた、昨夜つくつて置いた商品の包みを背負つて家を出た。行くところは近所の街道筋の大通りである。その包みはさほどにも思はなかつたのに、案外持つてみると重かつた。いやに腰がフラついて、肩がめり込むやうに痛かつた。それでも我慢して、目的の場所へ行つた。

然しほこりだらけの街道の家並みはどこを見ても、落ちついて店をひろげるに適した場所がなかつた。彼れは大分往つたり來たりしてやつと此處ならばと思ふ、空店の前をさがしあてて、用意の品をならべた。然し彼れには往き來する人の顔を見

て聲をかける度胸はともかく、どうしたらよいものか、露店商人の呼吸がわからなかつた。はじめは通るものの容子をじろり、じろり見ながら如何にも手もちぶさたらしい格好をして坐つてゐた。

まだ朝のうちで、通るのは、勤め先きへ急ぐ人か下町へ用足しに出る人ばかりでみな歩調が早かつた。多くはわき目もふらずに歩いて行つた。

さうしてゐる間に君はかなり倦怠を感じて來て、疲れてもきた。それに、ふと今迄のやうに通る人の顔を見て居てはいけなさと感じた。そこで、もつて居る畫帖や書物をたんねんに見はじた。

それでも、客足がとまりさうなものだと思ふ氣が去らないので、時々視線をあげて人の顔を見た。それでも離れも足をとめさうにならなかつた。そのうちに畫が近くなつた。一人の男が足をとめて、ひよいと一冊畫帖をとり上げた君の心臓は早かねのやうに高鳴つた。

其の男は引つくりかへして畫帖をみてゐたが、黙つてそこへ置く、さつさと足早やに立去つた。S君の失望は大きかつた。

しばらくすると學生服の青年が立ち止まつた。そして畫帖と書物を見はじめた。今どこそはと思つた。「如何です？」と云はうとしたがS君はそのキツカケを失なつて、出さうになつた言葉をのみ込んでしまつた。

すると學生服の男は、黙つて銀貨を出して、その内の二冊を買つた。S君があはてて「有難うございます」と云つたときかれの姿は二三歩向ふへ行きかけてゐた。S君はたまらなく氣恥かしい、苛立たしい氣がした。

午後になると、通る人の足どりがさつき迄とはちがつて、ゆつくりと餘裕のある歩調になつた。それと共にあちこちに自分と同じような、僅かの荷物をもつた露店商人がいくたりも店を開いた。かれらは物なれた調子で商賣ものをならべて、ゆつくり構へて席をつくつたりしてゐた。S君の店の前にもちらほら立止まつて冷かし

てゆくものが出た。

古い博多の角帯によれよれの單衣をきて、バツトの切れを耳のうしろにはさんだ三十位の男が、狎れなれしく近寄つてきて、S君のそばに蹲踞んで、烟草の火を借りた。その男は並べてあるものを一つ二つ手にとつてみながら色んなことを問はず語りにしやべり出した。

S君の耳なれない符牒が此の男の口をついて彼れを面喰はせた「ダリ貫」だの、「ヤリ貫」だとか續けさまに云つた。それは商品の元値をきくらしかつたが、いくらのことかわからなかつた。たゞいゝ加減のあいさつをする外はなかつた。

「何しろ震災ものはこれからは駄目ですあね。これが出たては客がろくに見もしないで買つて行つたがね。かう人氣が落つきかけて來ちや望みがない。」さう云つて、自分が最初エハガキで大分儲けたが、それも僅かの間でバツタリ賣れが止まつて、今ではあてがないために遊んでゐるが、それでも商賣に出るよりは得がゆくと話し

た。そして、左の指にある太い指輪のあとを見せて、これも賣つて食ひつないでゐるが、別にこれといふ仕事がないので困つてゐるとも云つた。

S君は言葉つきからして本物の黒人じみたこの闖入者に内心恐れをなした。それにこの男が無氣味にもなつた。そのために碌に返事もしないでいゝ加減にあしらつてゐた。向ふもつまらなくなつたのか、名刺を一枚くれて、遊びに来てくれと世辭を云つて歸つて行つた。S君は少しほつとした。

すると、近所にゐた風船と玩具の店を出してゐる商人が、

「あの男位たちの悪い奴はたんともありません。僅か二三銭のネタでもつて十銭も十五銭もの値を呼んで賣りつけるのですから。まああんな奴は露店商人の中で極くの性わるです。」などと口を極めて罵つた。

S君はまたこれにも面喰つた。

さうしてゐる間に大分冷かしては足を止めたが、本物の客は一人もなかつた。彼れ

は少し苛々して來た。それでいくたり目かに値をきいた客に思ひ切つて、定價より十銭まけて値を云つた。すると溢つてとても買ひさうにもなかつたその男が黙つて金を出して、二冊まで買つて行つた。S君はこれに力を得て、客が足を止めると品物を出した。大ていの者は手にとつてそれを見た。それをS君は坐つてゐながら、いまにも聲がかゝるか、金を置いてくれるかとしきりに神経をとがらせて待つてゐるが、容易にそのけはひも見えなかつた。

S君は一層苛々してきた。そして定價をまけても關はないから賣つてしまひたいとしきりに思つた。さうして割引の値段で四冊まで賣つた。

もう夕方が近くなつた。こんどは電車を下りて歸つてくる人ばかりで、何となく歩調までゆつくりとして來た。大分足を止める者も出た。S君は一々品物を手渡しで見させた。そのうちで、一冊二冊と賣れて行つた。

それ迄に一どは場所を前の筋向ふの何處かの別荘らしい閉つた門の前に移つて、

品物をならべかへてみたが、大して變りはなかつた、夕方になつて、ちらほら灯りがみえはじめた。幸ひそこは街燈があるので、夜まで大丈夫だと思つてゐた。ぼつぼつ、雨が、曇つて憂鬱な沈黙したやうな空から落ちてきた。それが容易に止みさうになかつた。そこで君はあはてて、荷をしまつた。

若し今夜出て居たら、もう少しは賣れたらうにと頻りに思ひながら、三圓いくらかの賣り上を入れた財布を懐中にしてとぼとぼ雨の中を歸つた。しかもこの中の純粹の儲けは七八十錢にすぎなかつたのだつた。彼れは大へん疲れて身體中が重くごちなかつた。そしてたゞ眠りを欲した。

五 玄米飯の話

震災の後にはちばん閉口だつたのは齒ざはりのわるい玄米の飯だつた。これはどの位、食事の氣分を害したかわからなかつた。

丁度晦日の勘定のあとで米を取らうとしたせいで大い家は米がなかつた。そこで二日目三日目あたりからもう白米の飢饉が襲つて來た。馬鈴薯や乾うどんも容易に入らなかつた。たゞ玄米が米屋に多少あつた。それを搗く臼も杵もない家では、玄米のまゝで食べる外はなかつた。然し玄米の炊き方を知らないものには、それを食べることは殆んど苦痛を伴ふのだつた。

然しいく日もこのうす玄米、糠くさい、固い、感じのわるい、半煮への玄米飯が、呪はれたやうに膳の上に現はれた、女たちは反つてそれになれ易かつたが、主人はそれに閉口した。

すると玄米をビール瓶でつくると十五分で白米になるといふ噂を彼れは近所の自警團の仲間が話してゐるのを耳にした。そこで彼れはあることを思ひついた。勿論それが出来るかどうかはわからなかつたが、彼れはビール瓶をどうしてつくのか其話を一層たしかめる方法もなかつたので、自分の考へついたその方法を實行した。

彼れの方法とは玄米をビール瓶に一ぱいつめること、それを手ごろな衣紋竹を中へ立てて、ごりごり突いてみるにだつた。それはやさしいようでも仲々力のいるおまけに根しごとだつた。先づそばに時計を置いてせつせと衣紋竹を動かした。

退屈して、額に汗をにじませてへとへとになるころ十五分が経つた。そこでその瓶の中の米を桶へあけて、水で洗つてみるとそこにはすきとほるやうな白米があつた。それを見ながらいく日ぶりで救はれたやうに彼れは感じたのであつた。

今迄の生活様式をかへるべく、餘儀なくされた都會人には事々がかうして不便であり、苦痛であつた。いく日かはさきのわからぬ不安の裡に日を暮したあとで考へると滑稽な位なことが、その當座はまじめな眞剣な問題であつた。

ある人は乾物ものだの、菓子だのを餘るほど買ひ込んだりした。勿論餘震と火事の恐怖のために衣類の大包みをほどかすにいつも避難の用意をしてゐた。

この不安な雰圍氣に大人よりも一層敏感な子供たちは一入みじめであつた。いつ

もなら大勢集まつて、唱歌や遊戯で夢中になつてゐる小さい連中も震災後一週間はかりはひつそりとして歌一つうたはうとしなかつた。また、下町から焼け出された子供たちは薄よごれた着物一枚で、よその家で食事してゐるところをいぢらしさうにしよんぼり立つて見てゐることなどが多かつた。それでも菓子一つやる人は餘りなかつた。

地方の物資が移入される前は、東京市中は敵軍に包圍された籠城の氣分が、すべての生活につきままとつてゐた。人間が險しく殺氣立つて、うるほひが見えなかつた。たゞ食つて生きてゐる、明日も知らない、衝動と本能とで生きてゐる生き物にすぎなかつた。すべてはその間におこつた悲劇だ。大震と大火の悪夢に續く現實の苦しい、沈鬱な一月間の恐怖時代！それを私たちは何んなにあがいて苦しんだことか。

大正十二年十一月二日印刷
同 年十一月五日發行

哀話と佳話の巻奥附
定價金壹圓貳拾錢

復製
不許

震災マロンス
= 哀話と佳話の巻 =

編著者

荒野耕平

發行者

東京市小石川區戸崎町十四番地
小川萬太郎

印刷者

東京市本郷區駒込吉祥寺町二九番地
加藤保

印刷所

東京市本郷區駒込吉祥寺町二九番地
文明社假營業所

發行所
發賣所

東京市小石川區戸崎町十四番地
振替口座東京三六一〇五番
東京市神田區錦町一丁目十九番地

誠進堂書店
誠文堂書店

526
2
18

526
2
18

終